

# あだたら

## โรงพยาบาลอุบลรัตน์

◇特集 地域医療と世界をつなぐ～人材育成の現場から～

タイ東北部コンケン地方郊外にある村の病院にて



地方で受けられる医療サービスについてパネルを使って説明する現地スタッフ



運動しながら水をくむことができる「自転車揚水ポンプ」

# 地域医療と世界をつなぐ

## ～人材育成の現場から～

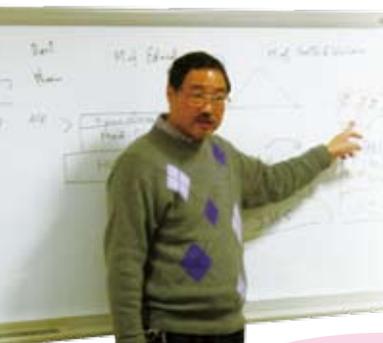
福島県立医科大学（以下「県立医大」）の林正幸教授（保健情報科学・疫学）と後藤あや准教授（公衆衛生学）は、県立医大で教鞭を取られるかたわら、それぞれタイとベトナムの人材育成への支援も続けていらっしゃいます。学生との関わり、JICAとの関わり、現在行っている活動についてインタビューしてきました。

◎林教授とJICAとの関わりについて教えてください。

▲1992年に当時の厚生省からタイ東北部に3ヶ月間、母子保健協力プロジェクトの技術協力専門家として赴任しました。その後プロジェクト終了までの数年間フォローアップに現地へ赴きました。98年に福島県立医科大学に転任後は、そのときの人脈をもとに、タイ東北部にあるコンケン大学との交流を続けています。

◎県立医大の学生はどのように関わっていますか？

▲福島には学生主体の国際保健サークル（Fukushima International Team, 以下FIT）があり、私はそのアドバイザーとしてお世話をしています。この活動の一環として、昨年度タイのコンケン大学へのスタディツアーを実施しました。



3人とも、将来看護師になってからも、この経験で得たことを仕事に生かしたいと話してくださいました。



スタディツアーでは、現地の病院、保健センター、高齢者やエイズに関わる施設や活動を見学してきました。FITメンバーである県立医大看護学部学生に聞きました。

◎FITに入った理由は何ですか？

▲本で国際協力のことを知って興味があったこと、将来関わりたいと考えていたことなどがきっかけです。

◎ツアーを終えて気持ちの変化はありましたか？

▲視野が広がり、身の回りの当たり前前の方が大切に思えるようになりました。実際に自分の目で見るのが貴重だと思いました。

◀インタビューに応じてくださったFITメンバー  
左から日下部典子さん、梅村由香里さん、佐藤遙香さん

県立医大の協力のもと、タイのコンケン大学の学生を6名福島県に招待しました。施設見学や地方視察などを通し日本の医療事情を学ぶとともに、学生間の交流も行いました。

流暢な英語を話す  
タイ・コンケン大学  
医学部の学生、  
Lalitaさん



タイ人学生に聞きました。

◎なぜこのプログラムに参加しましたか？

▲日本の文化、そして日本とタイの医療の違いを知りたかったからです。

◎福島の印象はどうですか？

▲保健・医療の違いには驚きましたが、タイも高齢化に向けて学ぶ点が多く、勉強になりました。福島は自然が美しく、楽しんでます。

◀タイの医療事情について発表する  
コンケン大学の学生たち



最後に、林教授に質問です。

◎タイと日本の学生の交流を続けてきて、変化はありますか？

▲今回、タイ学生の発表の中のトピックが人口が急速に高齢化するタイにおける医療・介護についてでした。これは今の日本の問題とも重なります。これからもこのような草の根の交流を繰り返し、互いに同じ問題に取り組む上で、アイデアや方法を共有することが大事だと思いました。

◎今後どのようなことに期待しますか？

▲日本人学生には、目的や目標を明確にし、世界を背負って立つとまではいなくても、必要とされていることを理解し実践してゆく、そういう姿勢と広い視野を持って取り組んでほしいと思います。



後藤あや准教授は、教員になられる約10年前から、ベトナムでの活動に携わっています。当時、米国の非営利団体 Population Councilのスタッフとして、ホーチミン市医科薬科大学にて疫学研修を行ったことが始まりです。これまでの研修活動を今後も持続的に続け、現地医師の人材育成のため、今年度からJICAの草の根技術協力事業を活用して、福島県国際課と福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座の事業として3年間のプロジェクトを運営していく予定です。



左はじは、JICA 短期専門家のご経験もある後藤あや准教授。そのとなりのお2人は、研修を共同運営している現地医師。



医師対象の疫学研修を行っている様子



研修参加者によるグループワークの様子

この疫学研修は、科学的根拠に基づく医療（evidence-based medicine, EBM）サービス向上のための人材育成を目的としています。具体的には、ホーチミン市医科薬科大学および関連病院の医師の、病院データを活用するスキルの向上を目指しています。この他、日本国内での母子保健分野の研修、現地病院での共同研究なども行ってきました。

**Q**今までの10年で、ベトナム側の変化はありますか？

**A**ベトナムのホーチミン市医科薬科大学などの中堅医師が対象ですが、だんだんと人材が育ってきて、現在はティーチングアシスタントの役割を担ってもらっています。また、大学関連病院での共同研究やスタッフ研修でも活躍しています。

**Q**長い間にわたる活動を続けるうえで工夫はありましたか？

**A**なるべく同じメンバーで長く続けることを心がけていました。今ではベトナム国内の知名度が上がっていて、このコースを地方でも受けたいという要望もあり、うれしいことです。

**Q**県立医大の学生は関わっていますか？

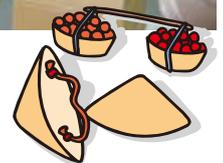
**A**過去に5回、13名をベトナムへ派遣し、国際保健分野で活躍できる日本人医師の育成に、ベトナム人医師が協力して下さっています。

**Q**今回の草の根技術協力事業を通じて、期待することはありますか？

**A**両国においてできるだけ多くの関連機関、そして、地域との連携を図っていきたいと思っています。



疫学研修を終え、修了式にて個人表彰を受ける参加者 右は県立医大医学部公衆衛生学講座教授の安村誠司氏



日本とベトナムの交流は長く続けたい、と笑顔でおっしゃった後藤准教授。今後ますますのご活躍が期待されます。

**JICA 草の根技術協力とは？**

日本のNGO、大学、地方自治体、公益法人、などがこれまでに地域で培ってきた経験や技術を活かして企画した開発途上国への協力活動を、JICAが支援し、共同で実施する事業です。

福島県内では、相馬市のNPO法人フー太郎の森基金がエチオピアの水供給と緑に関して、また伊達市と福島県ウズベキスタン文化経済交流協会が果樹栽培に関して技術協力プロジェクトを行っています。

詳しくは、仙台にあるJICA東北支部へお問合せください。 <http://www.jica.go.jp/tohoku/index.html>

# 地域を元気にする協力隊！

青年海外協力隊員として任国でのボランティア活動を終え、地元に戻ってきた元協力隊員のその後の活躍を取り上げるコーナーです。今回は、福島市出身で助産師としてインドネシアに派遣（平成15年度第3次隊）されていた大橋美貴さんをご紹介します。帰国後平成19年から郡山市の古川産婦人科に勤務し、4年目を迎える大橋さんのお仕事の様子をレポートします。



## □助産師外来開設

大橋さんは助産師として開発途上国のお産事情を知ることの強みを生かして、助産師外来の立ち上げに協力されました。妊婦の定期健診内容の充実、心のケア、相談支援等に積極的に関わられるしくみとなっています。一人の妊婦さんにつき30分、対話しながらエコー検診や保健指導・栄養指導などを行います。



## □マタニティビクスの認定インストラクター

大橋さんは、日本マタニティフィットネス協会認定インストラクターとして、週1回マタニティビクスを教えておられます。これは妊婦さんの体重コントロールやリフレッシュに効果があるほか、参加者同士が仲良くなり同窓会を開くなど、孤独になりがちな子育てママを支援するコミュニティ形成にも役立っているとのこと。



## □古川先生の応援あつてこそ

30年ほど前に、JICAと福島県立医科大学とで行ったガーナの医療協力プロジェクトがありました。古川産婦人科の院長である古川宣二先生は、そのときに医療専門家として参加され、現地に2年間滞在されました。そのときの経験などもあり青年海外協力隊活動を支援し続けておられます。現役の医師として活躍する傍ら、さまざまな研究発表に加え、積極的に先進的な医療の導入、よりよいスタッフの職場環境作りにご尽力されています。「世界の事情を知ったスタッフのエネルギーと意欲を得て、この地域の先進産科アカデミーとして研修生や見学者の集まる病院にしたい。また発表の機会をもっと作って、帰国隊員たちの経験や思いを多くの市民や病院従事者に聞かせたい。」と熱い思いを語っていただきました。



インドネシア滞在中、助産師学校でプレゼンテーションを行う大橋さん(右上)。帰国後は自己主張ができるようになったと話していただきました。

左から古川院長、二瓶さん、筆者、大橋さん。二瓶さんは平成19年度第2次隊でポリビアに助産師の職種で派遣されていた元青年海外協力隊員です。地域全体を見る眼、またコミュニケーション力などを培ったと話していただきました。



取材日：平成22年2月16日（火）



お問合せ：医療法人古川産婦人科

福島県郡山市本町 2-10-11 電話：024-922-1155

HP：http://www.kangaroo-hp.com/



# ≡ 学生のチカラ!

## + 看護で世界を変える + ～福島看護専門学校～

福島看護専門学校では、2～3年生の90名が、昨年12月にJICA二本松で訪問学習を行いました。そこで、自分たちと身近な看護師や理学療法士として開発途上で活躍した帰国ボランティアの話を知ることができました。大きく心を動かされた学生会のメンバーは、早速、文化祭売り上げのお金を国際協力の役に立てないかと提案。JICA基金に寄付をし、さらなる今後の活動へとつなげています。

学び

気づき

行動する

「学校を活性化させたい」「自分も何かやってみたい」「公私ともに充実させたい」「自分を成長させたい」「社会人経験を活かして楽しい学生生活にしたい」というそれぞれの思いを胸に、昼休みや放課後に活動する学生会メンバーにインタビューしました。

Q JICA二本松訓練所の訪問学習はいかがでしたか？

Aほとんどの学生が初めて行きました。世界について考える良いきっかけになりました。

Q今回JICA基金に寄付しようと思ったのはなぜですか？

A訪問学習を通して、世界のために自分たちも何かをしたいと思ったからです。

Q将来はどんな看護師になりたいですか？

A家族の気持ちがよく分かる、周りに目を向けられる看護師になりたいです。

A安心して気軽に話せる助産師になりたいです。

A身体的・精神的に支え、話していてほっとできる存在になりたいです。

A災害時の救急などに興味があります。また地域に貢献できる看護師になりたいです。

A生まれてから死ぬまで付き添う存在になりたいです。途上国の子どもを支援する活動にも興味があります。

左から高畑直仁さん、菅野千夏さん、田村比呂美さん、山口かおりさん、高橋麻美さん（全員3年生、学生会メンバー）



文化祭のときに空き缶アートを作成。そのときに不要になったプルタブを換金するため、回収作業を行っています。

皆さん、世界の人びとの役に立てるステキな看護師になってください!



校長の古関隆史先生

学生と一緒に訪問学習に訪れた古関校長先生にインタビューしました。

QなぜJICAの訪問学習を取り入れようと思われたのですか。

Aもともと学生の中に1～2名、将来青年海外協力隊員として活動したいという希望者がいました。また二本松にあるという身近な点が良いですね。

Qどのような看護学生を育てたいとお考えでいらっしゃいますか。

Aまずは地域に根ざした看護師です。おもいやりとやさしさ、そして笑顔で患者さんに寄り添える人になってほしい。身体的、精神的、社会的な三側面から、個別的に患者さんを、そして家族を見ていける看護師になってもらえればと願っています。そのための教育の一環として、国際的な視野を今回の訪問学習で得られたように思います。

取材日：平成22年4月13日（火）

### JICA二本松 訪問学習

青年海外協力隊とシニア海外ボランティアの派遣前訓練の行われている場所で、国際理解、国際協力などについて学ぶ機会を提供します。詳しくは、以下ホームページをご覧ください。

<http://www.jica.go.jp/nihonmatsu/enterprise/kaihatsu/houmon.html>

### 世界の人びとのためのJICA基金

寄付を通じてお一人おひとりに国際協力にご参加いただきながら、NGOなどの活動を通じて貧困や飢餓に苦しむ世界の人びとへ直接届く支援を行っています。詳しくは、以下ホームページをご覧ください。

[http://www.kifu.jica.go.jp/kifu\\_info/2\\_1.html](http://www.kifu.jica.go.jp/kifu_info/2_1.html)

# 異文化の眼 [第7回]

～一期一会の絆を大切に守りたい～



インドネシア語 語学講師  
エディザル  
(インドネシア出身)

初めて来日した時、目玉が飛び出るような物価と、速い足取りでいつも忙しそうな日本人を見て驚きました。それとは対照的に、インドネシア人はゆっくりと生活しています。日本に来るまで、インドネシア人がのんびり生活しているなんてことは全然感じていませんでした。

広島での留学後、長野県の子カ訓練所が建っています。「また寒い所に住む」とふっとため息をつきました。ですが「住めば都」ということで、今では自然に恵まれた福島の水や米や野菜や果物などがとても美味しいと気に入っています。

多くの地元の方々からの温かいご支援を受け、色々な難関を乗り越えて、落ち着いて生活をする事ができ、気がつけば14年という月日が過ぎました。二本松では多くの素晴らしい人々と出会うことができ、一期一会のこの絆を大切に守りたいと思います。

多くの地元の方々からの温かいご支援を受け、色々な難関を乗り越えて、落ち着いて生活をする事ができ、気がつけば14年という月日が過ぎました。二本松では多くの素晴らしい人々と出会うことができ、一期一会のこの絆を大切に守りたいと思います。

多くの地元の方々からの温かいご支援を受け、色々な難関を乗り越えて、落ち着いて生活をする事ができ、気がつけば14年という月日が過ぎました。二本松では多くの素晴らしい人々と出会うことができ、一期一会のこの絆を大切に守りたいと思います。

— インドネシア共和国 Data —

面積：約189万平方キロメートル	
人口：約2.28億人	(日本の約5倍)
首都：ジャカルタ	
言語：インドネシア語	
通貨：ルピア	



毎回1名ずつ、JICA 二本松勤務の語学講師をご紹介します。



▲ 市場の風景



▲ 水牛の角の形をしている伝統的な家



## 福島県在住 OB OG 体験記 [第7回]

### 悠久の歴史を持つ国からの教え

▼卓球大会の表彰式にて

平成19年度第2次隊 エジプト・体育  
三上 博史 (須賀川市在住)



◀バスケットボールの練習風景



教員を目指す私の選択は青年海外協力隊でした。クレオパトラが都を構えた地アレキサンドリアのスポーツクラブで知的障がいを持った人たちにスポーツ指導を行いました。初の海外でアラビア語もゼロからのスタートでした。宗教観が違いました。日本の見方が変わりました。自分自身で人間関係を築き一丸となって問題解決に尽力するという活動は協力隊ならではです。知的障がいを持った人たちのスポーツ技能の習得は簡単ではありませんが粘り強い適切な支援により可能になります。

できなかったことができるようになった瞬間の喜び、本人のうれしそうな笑顔は私の宝となっています。成功体験は自信になり自立につながります。教育の重要性を実感しました。

2年間の活動は教員としての「信念」、「価値観」、「心」、そして「生き方に正解はない」という教員力の根本的な学びを得ることができました。現在はさらなる教員力アップ目指し精進していきます。

# 福島県出身のJICAボランティア 平成22年度第1次隊

二本松青年海外協力隊訓練所では、204名のボランティアが4月8日(木)に派遣前訓練を開始しました。  
また長野県にある駒ヶ根訓練所では同じく238名が派遣前訓練を開始しました。

世界中の人々に、ほんとうの愛を送りたい・・・



**JOCV 田中 俊**  
出身地：福島市  
派遣予定国：ウガンダ  
職種：村落開発普及員

井戸の維持・管理及び、小学校等を巡回し水利用に関する啓蒙活動を行う予定です。現地の人々の水利用を少しでも改善できればと考えています。現地の活動を通して、福島ของ皆さんがアフリカを少しでも身近に感じて頂けたら嬉しいです。



**JOCV 佐藤 知史**  
出身地：白河市  
派遣予定国：モンゴル  
職種：理数科教師

訓練所では、厳しい日程ですが、多様な職種で、新卒やシニアの方など異年齢集団で楽しく有意義な日々を送っています。現職参加の裏には多くの方の協力・理解がありました。そのためにも、両国のために貢献できる活動をする事で、感謝の意を含めて還元していきたいと思っています。

**JOCV 原田 美波**  
出身地：会津美里町  
派遣予定国：ラオス  
職種：教師



ラオス語も訓練所で楽しく勉強しています。任国では現地の国の人々とうまくコミュニケーションをとりながら学び、様々な問題について考え、活動していきたいと思っています。2年間悔いの残らぬよう楽しく活動し、帰国後はラオスでの経験を生かし、子供達に多くを語る教員を目指して頑張りたいです。

**JOCV 小野 真理子**  
出身地：福島市  
派遣予定国：モザンビーク  
職種：青少年活動



204人との研修生活は、今までに経験したことがなく、さまざまなバックグラウンドを持った素晴らしいメンバーと過ごすことができ、充実した日々を送っています。ポルトガル語は難しく大変ですが、現地で少しでも子どもたちの笑顔を増やせるように、また世界が少しでもよりよくなることを願って、頑張りたいと思います。

**JOCV 石幡 絵美子**  
出身地：桑折町  
派遣予定国：マラウイ  
職種：村落開発普及員



現地では、井戸のメンテナンス指導、水管理組合の活性化、衛生指導など、生きる上で不可欠な「水」に関わる活動をします。たくさんの方々の協力の下、恵まれた環境で、同じ目標を持ったボランティアと共に訓練ができ、感謝しています。この貴重な時間を日々大切に過ごしていきたいと思っています。

## 駒ヶ根訓練所 福島県出身JICAボランティア (出身地/派遣予定国/職種)



**JOCV 片岡 由佳**  
出身地：郡山市  
派遣予定国：グアテマラ  
職種：小学校教諭

今集中的にグアテマラの公用語スペイン語を勉強しています。現地の子ども達と彼らを包んでいる保護者や先生方や地域の方々の思いをできるだけ理解したいと考えています。言葉の大切さを改めて感じています。子ども達の未来のために、今私にできることを精一杯して行こうと思います。



**JOCV 藤井 翔太**  
出身地：田村市  
派遣予定国：マーシャル  
職種：小学校教諭

訓練所での生活は、大変濃い日々ですが、同じ駒ヶ根訓練所仲間やマーシャル派遣予定仲間と切磋琢磨しあい、派遣に向けて更なる意識の向上を目指しています。私はマジロ環礁のウリガ小学校へ5代目として派遣予定です。先代が築いてきたことを継承しつつ、自由な発想と行動をもって活動に臨みたいです。

**JOCV 田中 真梨江**  
出身地：郡山市  
派遣予定国：ニジェール  
職種：理数科教師



派遣に関し不安はありますが、任国の生徒たちに少しでも理科の楽しさを伝えられるよう専門知識、語学ともにレベルを上げ派遣に備えられるよう精進したいと思います。帰国したら日本の学校で理科の教師になり、任国での経験を生徒たちに伝えていきたいです。

## 5月～8月のイベント情報

6月10日(木)	平成22年度第1次隊派遣前訓練修了式
6月14日(月)～18日(金)	JICAボランティア派遣前出身自治体表敬
6月16日(水)	JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2010募集開始(締切り9月15日)
7月8日(木)	平成22年度第2次隊派遣前訓練入所式(予定)
8月1日(日)	地球体験キャラバンスペシャル
8月16日(月)～26日(木)	教師海外研修モンゴル派遣

## 公開講座@ JICA 二本松

一般の方もボランティアと一緒に講座を受けることができます。普段あまり聞く機会がないけれど興味があるという方、ぜひお気軽にJICA 二本松にお越しください。(参加費：無料)

開催日	時間	講座内容
5月21日(金)	19:10～21:00	『地球のステージ』 講師：桑山紀彦(精神科医・医学博士、NPO法人地球のステージ代表理事、東北国際クリニック医師)
5月31日(月)	15:10～17:00	『ジェンダーと開発』 講師：服部朋子(NTCインターナショナル株式会社コンサルタント)

※申し込みは下記連絡先までどうぞ。  
※詳しい情報は、ホームページをご覧ください。  
<http://www.jica.go.jp/nihonmatsu/event/index.html>

## 読者の皆様へ

福島県内の小・中・高・大学等、会社、団体で行っている国際協力活動を紙面でご紹介します。情報をお寄せください。

## 福島県出身 JICA ボランティア 2010年4月6日現在(派遣中)

福島県出身 JICA ボランティア人数  
合計派遣中 43名 / 累計 578名

### 青年海外協力隊員数

派遣中	37名	累計	531名
-----	-----	----	------

### シニア海外ボランティア数

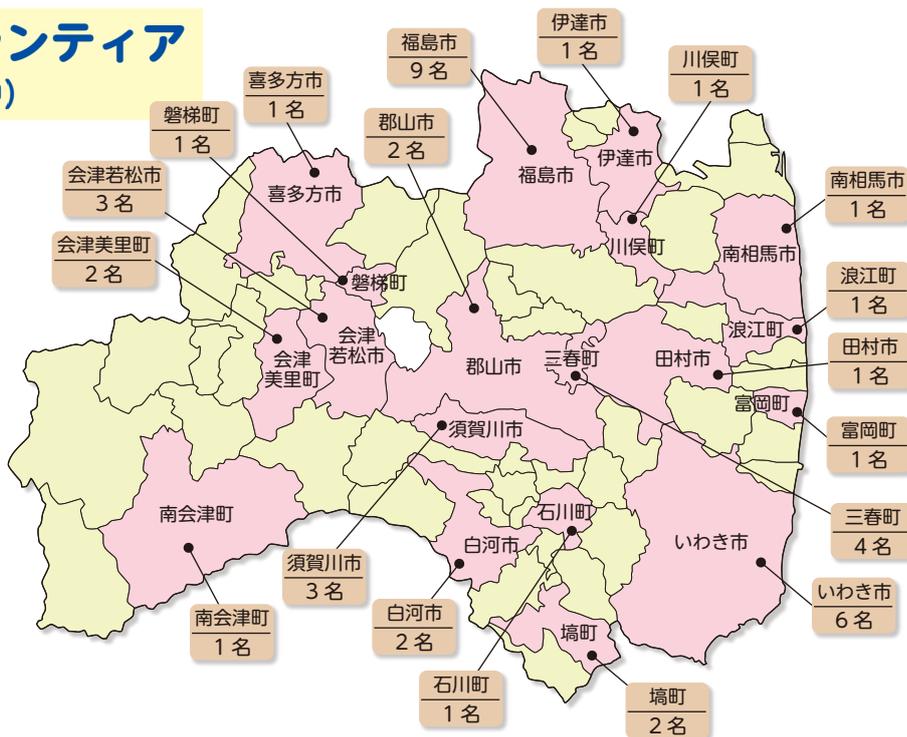
派遣中	5名	累計	34名
-----	----	----	-----

### 日系社会青年ボランティア数

派遣中	0名	累計	9名
-----	----	----	----

### 日系社会シニアボランティア数

派遣中	1名	累計	4名
-----	----	----	----



## JICA二本松へのアクセス

独立行政法人国際協力機構  
二本松青年海外協力隊訓練所

E-mail: [jicanjv@jica.go.jp](mailto:jicanjv@jica.go.jp)

〒964-8558

福島県二本松市永田字長坂4-2

TEL: 0243-24-3200

FAX: 0243-24-3214

◆本誌、バックナンバーがご覧になれます... ※皆様からのご意見等をお待ちしております。  
URL <http://www.jica.go.jp/branch/ntc/jimusho/newsletter.html>

本誌に関わるご意見・情報の連絡先  
国際協力推進員 清海陽子 財団法人福島県国際交流協会 JICA デスク

〒960-8103 福島県福島市舟場町2-1 福島県庁舟場町分館2階

TEL: 024-524-1315 FAX: 024-521-8308

Email: [jicadpd-desk-fukushimaken@jica.go.jp](mailto:jicadpd-desk-fukushimaken@jica.go.jp)

